

嘘つき

ナツシュは、よくわかっていなかった。目の前には子どもたちに囲まれた守りの人がいるが、彼の話を、ナツシュは最初から聞いていたわけではなかった。途中からこの輪の中に入ったのだ。夕飯を終えて、就寝時間が訪れるその間、保育部屋の子どもたちは、この交流洞という場所でまどろむ。いまのようにお伽話を聞いたり、友人たちとバダクル（ばらばらになった絵を組み立てる遊び。パズル）で遊んだり、ナクーの人形の取り合いをしたりして。

語り部である守りの人は、飛び出そうなほど大きな目をさらに突き出しながら、最後を語った。

「……そして、わっ！ と箱を開けると、中から出てきたのは、なんと大きながま口虫だったんだ。男はたいそう笑って、そのがま口虫をひよいと口に入れ、むしやむしや食っちゃまったとき！」

彼は、何かをつまんで咀嚼するふりをし、ひょうきんにべろりと口を舐めた。子どもたちはきやあきやあ笑い、何人かは「うええ！」と顔をしかめた。

「なんの箱を開けたの？」ナツシュは、隣にいる鼻の小さな男の子に訊ねた。

「がま口虫って、泥みたいな味がするんだぜ」彼は言った。「俺、食べたことあるもん！」

答えになっていなかったので、箱についてもう一度聞こうか、それともがま口虫を食べた経緯について聞こうか、それともあきれて黙ってしまおうか……迷っている間に、語り部が言った。

「じゃ、俺の番はこれで終わり。これ以上怖え話はねえだろ。どうだ？ お前やってみるか、枝豆？」

彼の手の中にはずっと、細長い独楽のようなものがあつた。その軸を、さっ

と、枝豆と呼ばれた男の子に向ける。

枝豆は、そのまあるく膨らんだ頬をぶるぶる震わせ、首を横に振った。

「ぼく、できないよ」

「そうか？ ……じゃあ、誰にしようか、なっ！」

言った瞬間、守りの人は独楽を天井へ投げた。石灯いしひの明かりが、心棒の先に  
ついた羽をふんわり光らせる。子どもたちは、声をそろえて歌った。

旅人さん

旅人さん

くるくる回る 旅人さん

お話聞きたい 誰の話？

落ちた独楽は、頭の羽を子どもたちにくるぐる向けた。彼らは、自分のところに来るよう息をふきかけ、叫んだ。

ようやく止まった独楽の羽がさした子を見て、守りの人は言った。

「ようし、ナツシユの番だ！ みんな、彼の話を聞こうじゃないか」

みんなは身じろぎをして、ナツシユに注目した。ナツシユは、はにかみながら服のすそで手をぬぐい、決まり通り、「旅人さん、どんなお話が聞きたいの？」とみんなに訊ねた。

誰かが、「怖いはなし！」と答えた。すると他の子も同じように「怖い話、怖い話！」と手を打った。

ナツシユは、顔をこわばらせた。頭の中を探って出てきたのは、たしかにみんなを怖がらせる話だったが、自分でもおびえていた。体が震えるほどに。

「語り部さん、怖い話、聞かせておくれ」

さつき語った守りの男が、形式にのっとって言い、独楽をナツシユに渡した。ナツシユは受け取ったが、気乗りしなかった。

黙っていると、斜め後ろから肩をたたかれた。

「どうした？ 何か話せよ。かぼちゃも聞きたがってる」

山のようなその男は、ガルドだった。ナツシユの隣の保育部屋で「かぼちゃ」という子どもの世話をしている〈育ての者〉だ。ふつくりと肥えたかぼちゃは、彼の腕の中におさまっていた。ガルドの太い腕は、子供を押しつぶしやしないか心配にさせられるが、かぼちゃは力強く「な、な」と、ナツシユの襟首を引き、少年を苦しめた。

「おげ。……ねえ、他のお話でもいいでしょ？」

「なに言ってるんだ！ 旅人のお話は聞かなきゃいけないんだぞ」輪の反対側にいる少年が言った。

「すっごく怖いやつにしてよ」一番小さい女の子が、急かして鼻を鳴らす。

「びびりなんだ！」真後ろにいる誰かが言った。

ナツシユは、鼻をぴくりとさせたが、急に寒気がしてきて、立ち上がった。

「君が話せばいいよ」

彼は、「びびり」と言ったやつにその場を任せ、交流洞の出口に向かった。後ろでは、独楽の取り合いが始まっていた。「やっぱ、びびりじゃん！」という声を聞いたのを最後に、ナツシユは洞を出た。

廊下の石灯は明かり窓が半分閉められ、あたりを薄暗くしていた。就寝時刻がせまっているからだ。あと一人、お話をし終えるころには、〈育ての者〉たちがみんなを保育部屋へ戻し始めるだろう。ナツシユは、だが、早めに保育部屋へ帰ろうとは思わなかった。

足はクエト石の庭へ向かった。庭の入り口には、丸形の木扉がされてい

る。雨が降っているせいだ。ナツシユは、その扉を横へ転がし、少し開けた。

冷たい雨風が顔を打つ。彼はそのまま、ずるずると座り込んだ。

いつもはたくさんの色を持っているクウェト石の庭も、いまは闇に飲まれて、灰の濃淡の海になっていた。地面に当たって跳ねた雨が、扉から出る細い光の部分で、ちらちら輝く。

しばらくナツシユは、その雨粒の煌めきを見つめた。

「あ。扉、あけてる！」

突然、耳障りな少女の声がし、ナツシユは、どきつとした。

「いけないだよ、夜に扉をあけちゃ！」

やって来たのは、髪を二つに結んだ少女だった。硬い直毛は、真横にびいんと伸びている。ナツシユは、彼女の仮名を『あけぼの』と知っていたが、呼んだことは一度もなかった。二つ年上のあけぼのは、誰に対しても年上ぶるのが好きな子で、ナツシユはそれを苦手としていたのだが、少しばかり尊敬もしていた。彼女の言うことは、理にかなっていることも多かったからだ。

あけぼのは、こちらにやってくるなり、扉を閉めようとした。

「うわあ、すごい雨」閉める直前、あけぼのは外をのぞいて言った。

「うん、あそこ、ほら、きれいでしょ」ナツシユは、光で輝く雨を指さした。

「でも、風邪ひくでしょ」

まったくその通りだったので、ナツシユは、そのまま扉を閉めてしまったあけぼのに、何も言えなかった。

「なんでここにいるの？ ……ああ、わかった。いじめられたんだ！」あけぼのは、ずばり言った。

「ちがうよ」

「ううん、ちがくないよ。だってここ、いじめられた子がよく来るところだも

ん。クラゲとか、地ナハ・イーマの花とかも、すごく泣いてここに来るの」彼女は小さな子の仮名を並べて言った。

「僕はちがう」

「ふうん。じゃあ、なんなの？」

あけぼのは、腰に手を当ててそそり立つ。ナツシユがそっぽを向いていると、彼女は隣に座ってきた。放っておいてほしかったが、さつき開けてしまった怖い話の蓋が、まだ閉じられていなかったもので、だれかの体温を感じることは心強かった。

「お話旅人の独楽が、まわって来ちゃったただだよ」ナツシユは身じろぎをし、胡坐をかいた。

「それだけ!! ……ああ、でも分かる。あたしもそういう時あった。あのね、四つか五つの時にね、最初に守りの人が独楽を投げてくれたのね、それでね、一度壁にぶつかっちゃったんだけど、もう一回投げた時にはね……」

あけぼのは、それから長々と自分の経験を語った。ナツシユは相槌を打ちながら、気持ち半分で聞いた。彼女の話にも、閉じられた庭の扉にも、この複雑な恐怖から逃れる策がなかったからだ。いまは、雨が欲しかった。きらきら静かに光る雨。

ナツシユは、ちよつと離れ、去る気配を見せた。

「……で、あんたはなんの話をしたの？」あけぼのは、引き留めるようにナツシユに訊ねた。

「べつに」ナツシユは少し離れたところで抱え膝になった。「怖い話をしてって言われたただだよ。お話しはしてないよ」

「そう、まあ、そうだよね。だって怖い話って、あんたくらいの年の子じゃ、難しいもん。やるなら、楽しい話とか、面白い話とかだよね。それは、あんた

の年を考えなかったみんなが悪いよ！」

あけぼのは、ナツシユと目を合わせようとする。だがそれは、誤った言葉を伴っては、救いにならなかった。ナツシユは、視線から逃れ続けた。

「ぼくだって、怖い話ができるよ！ でも、みんながちびっちゃうと思ったからやめたんだ」

「あっはは！ あっはは、あっはは！」

あけぼのは、腹を抱えて笑いだした。ナツシユの頭は一気に熱くなった。

「ぼくもできるんだってば！ このわからずや」

「なあに？ ガ・アーケン・ピノへ 赤っ粒（列を作って足元を走り抜ける、赤くて小さい魔法動物）を見た話とか？ あっはは、あっはは！」

「ちがうよ！ もっと怖い話っ。しかも、僕が本当に見た話なんだからな！」

「へえ、どんなの？」あけぼのは、ふふんと鼻を鳴らした。

「話してもいいけど、どうせ君は信じないから話さないよ。それに、夜中に便所へ行けなくなるだろうから、黙っておくよ」ナツシユは、彼女を睨みつけた。

あけぼのは、ナツシユの二の腕を叩いた。「話せ！話せ！ どうせ薄っぺらい話でしょ。だから話したくないでしょ！」

叩き続けるあけぼのを、ナツシユは乱暴に押しつけた。

「いいや、君がわからずやだからだよ。約束するなら、話してやってもいいよ」本当は話す気などなかったのだが、ナツシユは、自分だけが知る恐ろしい思いを、彼女にも植え付けてやろうと思った。恐怖が膨らんで彼女を引き裂くところを、ナツシユはいままさに望んでいた。

「は！ どんな約束よ」あけぼのは、顎を突き出して、ナツシユを見下ろした。

『誰にも話さない』って約束だよ。できるの？できないの？』

「なんであんたがいばってるのよ。早く話しなさいってば」

「それくらい怖い話なんだってば」ナツシユはあけぼのを真似して言った。

その声がやけに静かだったせいか、あけぼのはさつきよりも顎を引いた。

「で、どんな話なの？」彼女は向き合うように座りなおした。

「約束する？」ナツシユは確認した。

「するよ、する」

あけぼのは、頭から生えた二本の角のような髪を、両手でさっと払った。このとき、ナツシユがもう少しあけぼのを理解していれば、これからの保育部屋生活はみじめなものにならなかったのかもしれない。あけぼのが髪を払った瞬間、ナツシユは口を開かなければよかったのだ。しかし、当時のナツシユには、彼女を見返してやろうという尖りきった思いしかなかった。

ナツシユは、突き刺すように語り始めた。

「これは、僕が5つだったときの話だ。太陽の季節の頃で、僕はピクランタと一緒にアケラスの竜を見に行ったんだ。アケラスの竜は、アバルバン谷であつて……初めて馬便に乗ったのもこのときで、すっごく、すっごく楽しかったんだ」

これは自慢だ。そつとあけぼのの顔を見る。あけぼのは、じっと目を見開いて、話の続きを待っていた。

「そうして、ついに、谷に着いたんだ。他の子たちも一緒だったけど、僕は一番に見に行きたかったから、アケラスの竜が見下ろせる崖へ向かった。白い坂を登っていくんだ。その坂の上にはさ、灰色をした綺麗な木があるんだよ。触るとすごくぬめらかで、水みたいに冷たい。模様もまるで川みたいだった。でもそこで、誰かがいる音がした。……木の向こうをのぞくと、アベドがいた」ナツシユは息を呑んだ。のどに石が詰まっているような感覚になる。絞り出すように、続きを言う。「……でも、全然見えなかった」

「え、どういう意味？」あけぼのは眉を寄せた。

「目を開けているのに、突然、真っ暗になったんだ。起きながら眠っちゃったみたいにさ」

ナツシユは、目を閉じてみせた。

「……………それから、声が聞こえた。風が扉を叩くみたいな声だ。それを聞いていると、だんだん気持ち悪くなって…………」

ナツシユは、そこで沈黙した。手足がいつの間にか凍えていた。さつき当たった雨のせいにしては、震えがひどかった。息が荒くなり、光が遠ざかる。

「で、なんなの？ それからあんた、どうなったの？」

あけぼのが強くナツシユを押ししたので、彼は我に返って深く息を吸えた。あけぼのと一瞬目が合う。彼女の目をちゃんと見たのは、これが初めてだった。

彼女の目は、薄暗いどんぐり色をしていて、不信と怯えで歪んでいた。

「僕、気づいたら、ピクランタが坂を上がってくるのを見ていたんだ。さつき見ていたはずの崖の先は、後ろにあった。だれかが僕の向きを変えたのか？ それもわからない。びっくりしたけど、それどころじゃなかった。ピクランタは、『大丈夫か？』って言ったあと、僕を竜が見えるところにつれていこうとした。でもそこは、あの『眠ったようになるアベド』がいた場所だったんだよ。近づきたくなかった。だから僕は逃げ出した。ピクランタは怒ったけど、どうしようもなかった…………」

少しの間、雨の音しかなかった。ナツシユの呼吸音が、一つ混ざった。

ようやく、あけぼのは割り座をくずして片膝を立て、頬杖をついた。

「わあ、ふうん」小さな声で、彼女は言った。「今の…………怖かった！ ちょっと、ちよつと怖かったよ！」

ナツシユは、人差し指で地面に円を描いた。



「あれから、ずっとアバルバン谷には行ってない。眠りのアベドが、いるところだからね」

「へえ、すごいね。あんた、お話しづくり上手だよ！　すごい、すごい！」  
ナツシュの円を描く指が止まった。ぞっと毛が逆立った。

「いまの……、いまの本当の話なんだよっ？　ちゃんと聞いてた？」

あけぼのは、高く笑った。よく喋る口が真っ黒に開く。

「あはは、嘘だよ！　だって、あんたはまだ子どもだもん。なんにもわからないから、いろいろ怖く見えちゃうんだよ。あのね、あたしの〈育ての者〉が言っていた。『夜が怖いのは、ものがちゃんと見えなくなって、なにか別のものに見えるから』って。あんたが見たのは、きっと木の影とか、布だよ」

「そんなことない！　あれはアベドだったんだ、絶対に！」

「ふんふん、へえ。じゃあ、証拠はあるの？」

あけぼのは、真剣な眉をしつつも、口角が上がっていた。

ナツシュは、肩をわななかせた。

「あるよ！　ピクランタなら知ってる。僕と一緒にいたんだから」

ナツシュは〈育ての者〉であるピクランタを呼びに行こうとしたが、今日は掃除のために自宅へ帰っていて、育ての丘にいないことに気づいた。

「ねえ。でも、あんたの〈育ての者〉は、その眠りのアベドっていうのを見てないんじゃないの？」

おかしそうに笑うあけぼのが、憎くてたまらなかった。それと同時に、言っていることは真実だった。

あけぼのは立ち上がった。彼女の背は、ナツシュよりも高かった。

「証拠がないお話は、作り話っていうんだよ。ね？」

あけぼのは「じゃあね！」と、笑って去っていった。ナツシュは、地団太を

踏んで、涙を浮かべた。

「作り話じゃない！ 本当のことなんだ。本当にあつたことで……」

雨を伴う風が扉をたたき、あのとときの恐ろしい声と重なった。眠りのアベドによって暗闇にとらわれたナツシュを、引き裂こうとする低い声が、また後ろから迫ってきた。

「本当なんだ！」

だが、あけぼのはもういなかった。一日を楽しんだ笑い声と、眠りへといざなう守りの人たちの穏やかな声が、遠くから聞こえた。

あけぼのとは二度と口を利くまい。ナツシュは心に誓った。けれど、彼女のほうから声をかけてくることもなかった。なぜなら、会うことがなかったからだ。彼女の保育部屋とナツシュの保育部屋は、まったく顔を見なくても生活できるほど、離れていた。

だが、ナツシュの誓いは、まもなく破られた。

それは、交流洞で起こった。中央では、あの時と同じように旅人のお話がされていたが、異なるのは、ナツシュが輪に入っていないことだった。彼は、隅でバダクルをやりながら、時折、お話しの方に耳を傾けていた。一緒にバダクルをやっている男の子が、一つの断片をナツシュに見せる。「ねえ、これに鼻くそつけてみた」

ナツシュは、「立派だね」と頷いて、自分が埋めたい箇所の断片を探した。

お話しのお輪では、女の子が声高に語っていた。

「……それで、その子はアバルバン谷で出会いました。『真っ暗アベド』に。で

も、ちゃんと見ることはできなかつたのです。なぜかというと、目がとられたみたいになにも見えなくなったから！ 目も見えないし、怖い声は聞こえるしで、その子どもは気持ち悪くなって、えーんえーんって泣きました。でも、気が付いた時には、また目が見えるようになっていました。そして、恐ろしいことに、『真っ暗アベド』はいなくなっていたのです！ その子は、あまりの怖さにおもらしをしてしまい、〈育ての者〉のところまで一目散に逃げました。それが、アバルバン谷の暗闇恐怖事件なのです。アバルバン谷には、いまもいるとされています。子どもを呪う、『真っ暗アベド』が」

子どもたちは、一斉にざわめいた。悲鳴まで上がる。守りの人が言った。「おい、あけぼの。いまのはとんでもなく怖いお話だぜ。今日は君が一番だな！」

だが、最後に喚き声が入った。輪の中に突然、黒髪の子どもが飛び込んできたのだ。彼はなにかを叫びながら、あけぼのにつかみかろうとした。とっさに別の守りの人が取り押さえる。

「どうしたの、ナツシュ！」

ナツシュは、すぐに言葉が出てこなかつた。あけぼのが驚きと気まずさを浮かべてこつちを見ているのを、ただ睨んで吠えつけていた。

ようやく、自分が何を言っているのか耳に入ってきた。

「嘘つき、嘘つき！ 約束したのにつ。お前なんか大っ嫌いだ！」

「ナツシュ、やめなさい！」

「この子だよ。ほら、『真っ暗アベド』に会った子！」

あけぼのは、あっけらかんとして言った。「えええええ！」周りにいた子どもたちが悲鳴を上げる。好奇心と恐怖で丸くなった目が、羽交い絞めされたナツシュを射貫いた。何人かが数歩下がるのが見える。

「ナツシュ、みんな怖がっているじゃないの。なんの約束かはわからないけれ

ど、あけぼのだって悪気があってやったわけじゃないでしょ、ねえ？」

守りの女は、あけぼのに訊ねる。あけぼのは、硬い顔でこくりと頷く。

シラを切り続ける彼女に、ナツシユの怒りは爆発した。彼はうなつて腕を振り回した。あけぼのは目をそらし続けた。謝りの言葉は、その口からは出てこなかった。

「嫌だったのに！」守りの人の腕の中で、ナツシユは怒り狂った。「約束したのに、この嘘つき！」

暴れて交流洞の外へ引きずられていく子どもを、輪の端から、一人の少年が見ていた。彼は、長い手足を硬く寄せ、喚くナツシユを目を丸くして見つめた。守りの人がなだめている。「これは遊びだから……また新しくお話をつくれればいいじゃないの、ナツシユ。あのお話、とても怖かったわよ？」

「あれはほんとにあったことなんだ！」

ナツシユは目をぎらつかせ、激昂している。

手足の長い少年は、彼をじっと見つめた。

少年の折りたたまれた足の傍に、小さい女の子が身を寄せた。女の子の柔らかな巻き毛が、少年の足をかする。

「ねえ、蜘蛛。どうして怒ってるの、あの子」

蜘蛛は、一緒に保育部屋で育ったこの女の子に、肩をすくめて見せた。

「さあな。でもあいつ、さっきの話は本当だって言ってた。たぶん、『真っ暗アベド』に会ったときに、おかしくなったんだ。だからあんなに喚いているんだよ」

彼は、自分の頭の上にくるくると円を描いた。女の子は、ぎよっとして身を

引いた。

「どうだ？　いまの話、怖かっただろ」蜘蛛は、にやり笑みを浮かべた。

「それ、ほんとの話!? あの子、ほんとにそうなっちゃったの？」女の子は、ナツシュをまじまじと見つめた。

「あんまり見ると、呪われるよ」

蜘蛛に言われて、女の子はさっと目をそらした。その反応に、蜘蛛は余計笑った。

「ねえ、嘘なの？　ほんとなの？」女の子は、必死に真偽を問い詰めた。

蜘蛛は、おかしくて笑い死にそうだった。

「さあ、どうかな？」彼は、視線をナツシュに戻した。じっとナツシュを見つめる。それからまた、女の子に目を向けた。

「あいつには、近づくなよ」



ナツシュの暴走について、ピクランタもガルドも特に話題にすることはなかった。それが、ナツシュにとって楽ではあったし、怖くもあった。なぜ怒ったのか、理由は聞かれなかった。

他の守りの人から報告を受けたはずなのに、なぜ口にしないのか、不思議ではあった。けれど、自ら進んで話そうとも思わなかった。あれは自分があげばのに明かしたのも悪かったと考え始めていたからだ。けれど、たぶん、ピクランタもガルドも、尊重してくれていたのだろう。ときに、怒りというのは言葉

にしづらい。ましてや、何重にも起こると。だんまりを決め込むナツシュに対し、彼らは同じく沈黙で受け入れるのだった。

何日かナツシュは不機嫌を着き通していたが、それも疲れ果てると、好きな工作にのめりこんだ。彼はクウエクト石の庭で、集めた木片を使い、馬便の模型を作っていた。

近くで遊んでいた子たちが、その出来栄を見て、褒めた。「僕もそれ一台ほしい！」一人、少年が言った。

「後でね。つくってあげるよ」

ナツシュは言うのと、色を付けるために、絵の具を保育部屋へ取りに行った。戻ってくると、さっきの子たちが、顔を強張らせてこっちを見ていた。立ったり座ったりしている彼らの足元には、派手な色をした鳥の玩具が転がっていた。馬便は粉々になっている。屋根は吹っ飛び、馬の首は折れていた。

「なにしたんだ!？」

ナツシュは、絶句して鳥の玩具を持ち上げた。瞬間、「おい、触んな!」と、誰かが後ろから鳥をひったくった。

男の子だ。自分より年下の。

「この鳥を飛ばしたの、君か？」ナツシュは、男の子の手首をつかんだ。男の子は、すぐさま手を振りほどいた。

「うっせえな。……うええ、きも。糊くつついてる」

そこへ何人もの少年がやってきた。みんな腹を抱え、ゲラゲラ笑っている。

「こんなところまで飛んだ! すげえ!」

「もう一回、やって見せてよ!」

「あーあ。壊れちゃってる」誰かがナツシュの馬便を見て、軽く呟いた。

「こんどはさあ、竜でやろうぜ!」

その時、誰よりも大きな声で、「やったな。大成功だ！」と、手足の長い少年が駆けて来た。年はナツシユと同じくらいだ。輝く目、抜けた歯。

ナツシユは、さつと血が上った。

「飛ばすんならむこうでやってよ！ もうあっちいけよ」

ナツシユの怒鳴り声に、少年は、一瞬、長い腕を広げた格好で固まった。が、急いで笑みを浮かべた。

「おい、やべえぞ！ みんな、退散！ こいつから離れるんだ。こいつ、やばいもの見えるんだぜ。呪われるぞ！」

ナツシユは、ぎくつとした。彼はもしや、あけぼのの話のことを言っているのでは。

「おい、まて！ 謝れよ！」ナツシユは叫んだ。

「魔法動物だー！」

「にーげーろ！ にーげーろ！」

子どもたちは駆け出した。ナツシユが追いかけると、彼らはよけいに笑って走った。

ナツシユは、首謀である手足の長い少年を追いかけた。ナツシユは足が速かったが、それと同じくらい、蜘蛛も速かった。

蜘蛛は、その目を境に、ナツシユの怒りを買うことを、わざとやるようになった。蜘蛛は、ナツシユを気に入ったらしい。ナツシユが怒って追いかけると、蜘蛛はたいてい、あざ笑って逃げおおせた。

それを見ていた小さな子たちは、蜘蛛の真似をするようになった。彼らは、

蜘蛛がいなくても、ナツシユをからかう役を買って出たのだ。それは、ナツシユにとって屈辱的なことだった。ナツシユは、怒って、吠え、応戦した。が、余計「ナツシユ変な子説」を強めることになってしまった。

ナツシユは、つつかれたり、脅かされたりした。次第に、転がされたり、蹴られたり、物を隠されたり、当てられるようになった。恐ろしいことに、どの年の子にもやられた。

こういったことは、一度火がつくと即座に広がる。広がることに、複雑な理由はない。ただ、おもしろいからだ。怖いもの、嫌いなもの、意味の分からないもの、それから逃げて、楽しむ。ただそれだけでいい。深い意味はない。

保育部屋にいる守りの人たちは、この状況に何度も付き合わされ、「いいかげん、からかうのはやめなさい」とか、「もつと仲良くなりなさい」とか言って、場をおさめようとした。けれど、やめるのは一時的だ。守りの人の言葉の効力は、守りの人がいるところでのみ發揮される。

ナツシユは、自分ももっと速ければ、蜘蛛を取っ捕まえて懲らしめることができるのに、と思った。やつが続ける限り、年下の子たちも続けるのだから。しかし、ナツシユが成長する分、彼も同じ分だけ成長するのだった。筋力は五分五分。そして、言葉の暴力は、蜘蛛の方が勝っていた。

やがて、ナツシユの周りに、友達と呼べるものが一人もいなくなった。近づく『変なものが見える呪い』をもらうから。子どもたちの間ではそうなっているらしい。やがて、『呪い狼』という遊びが流行りはじめた。呪いをもっている者を狼に見立てて逃げる遊びなのだが、その呪いを持っている狼というのがナツシユであり、彼は永遠に狼だった。役の交代のないその遊びは、ナツシユの心に蓋を作りはじめた。

ピクランタは、こういった状況に心を痛めたが「なにも友だちがすべてでは



ないさ。世界には、お前にふさわしい素敵なものがたくさんある」と言って、ナツシユが無理をしないようにした。けれどナツシユは、自分がまったく強くないことに嫌気がさしていた。もつと力があれば……、ガルドみたいに盛り上がった肩があれば、あいつらを負かしてやれるのに。あいつらをこてんぱんにやっつけられるのに。だが、ナツシユにあるのは、おびえて疲れ果てた大きな黒目だった。

そんなナツシユにピ克蘭タが教えてくれたのは、アベドを投げ飛ばす方法ではなく、アベドを忘れる方法だった。

「この世界で一番強いのは何だと思う？ 答えは石だ。陽がなくても、水がなくても、空気がなくても、石だけは存在できる。鉄みたいに錆びて脆くならなし、どんなに細かくなっても、存在できるんだ。だから、自分は石だと思うんだ。周りのことなんて気にするな。そして、自分をずっとかたく中に持つておくんだ。そうすれば、いつでもお前は、お前でいられる。そしてあるとき、真の力を発揮できるんだ」

ナツシユは、それをなんとなく理解して、やたらに反撃することをやめた。無視を突き通していくと、からかってくるやつが、とてもつまらないやつなんだと思うようになった。蜘蛛は攻撃の手を緩めなかったが、ナツシユは、彼が追いかける価値もないやつだということを徐々に知った。

ナツシユはそうして、あまり目立つことをやめて、気にかげられないようにした。どんなに蜘蛛が突っかかってくるでも、無視することにした。ピ克蘭タの助言通り、その辺の石ころと同じように気配を消し、変な気づかいと不当な攻撃が、極力浴びせられないようにした。

蜘蛛はそれが面白くなくて、さらにちよつかいを出してきた。だが、ナツシユは応えなかった。「お前は呪いの塊だ」とか、「狂言者！」とか言われようが、

ナツシユは身を小さくして耐えた。

そして、ナツシユは決意した。

もう二度とこんなことが起きないように、アバルバン谷での出来事は一人で抱えておき、心の奥底にしまっておこう、と。

もしそれが話されることがあるとするならば、それはきつと、これを真摯に受け止め、判断できる、こここの誰とも違うアベドが現れてからになるだろう。